

卵巣粘液性癌の遺伝子変異と Invasive pattern の関連性の検討

1. 研究の対象

1984年1月～2019年9月までの間に当院で治療を受けた卵巣粘液性癌及び粘液性境界悪性腫瘍の患者さんが対象となります。

2. 研究目的・方法

卵巣癌の組織型には代表的なものとして、漿液性、類内膜、明細胞、粘液性があります。

漿液性癌と類内膜癌は腫瘍の分化度（悪性度）に応じて Grade がつけられています。Grade が高いほど進行が早く抗癌剤が効きやすいとされます。しかし粘液性癌と明細胞癌には Grade が使われていないのが現状です。

粘液性癌は全卵巣癌の11%程度を占め、比較的少ない組織型です。I期の症例では5年生存率90%で、予後が他の組織型と比較して良いですが、II期以上の症例では予後が悪いとされています。これは化学療法への治療抵抗性が強いことが原因であると考えられています。日常診療でも遭遇することが比較的少ない疾患であり、粘液性癌の予後等に関わる因子を発見することは重要な課題であると考えられます。2014WHO分類から Infiltrative pattern と Expansile pattern が浸潤形態分類として新たに導入されましたが、文献上まだ十分な情報がありませんでした。そのため当科において粘液性癌の Invasive pattern ごとの臨床病理学的情報をより明確にすることを目的とし、研究を行ってきました。その結果 Infiltrative pattern は Expansile pattern と比較して予後不良であることが示されました。また、漿液性癌は Grade の高さと、腫瘍細胞の遺伝情報に強い相関を認め、個別に治療法が開発されてきているのが現状です。そのため Invasive pattern と粘液性癌の遺伝情報を比較検討することは、漿液性癌と同様に粘液性癌の新たな治療法の開発に大きく貢献できると考えられます。

そこで今回は当院で治療を受けた粘液性癌患者さんを対象とし、既存試料である病理検体を用いて、Invasive pattern ごとに分類し、各 Invasive pattern の免疫染色や遺伝情報解析を行い、その関連性について検討することを目的として研究を行う予定です。これにより新しい Invasive pattern と遺伝情報などに相関を認めれば、Invasive pattern ごとの治療法などにつながると考えられます。

研究期間は学校長承認後から2023年12月31日までを予定しています。

すでに保管されている病理組織検体を用いる調査研究ですので、研究のために追加で検査を行うことや、新たな検体の採取を行うことはありません。また金銭的な負担が生じることもありません。

研究に協力いただいた方への直接的な利益はありませんが、本研究によってもし粘液性癌の Invasive pattern 評価と遺伝情報などに相関を認めれば、今後の卵巣癌治療への診療成績の向上の一助になり得ると考えられます。

3. 研究に用いる試料・情報の種類

既に摘出・作成された病理組織を研究に用いて、症例ごとに Invasive pattern を分けます。その後保存検体の免疫染色や、タカラバイオ社に送付して遺伝情報解析を行います。また診療録（カルテ）から病気の発症日（診断日）から死亡・再発・増悪までの期間、治療内容、抗癌剤治療の有無とその効果、癌のひろがり（進行期）、その他日常診療で得られた年齢や身長・体重などの臨床データ及び腫瘍マーカー等の検査データ等を採取し解析する予定です。

4. お問い合わせ先

本研究に関するご質問等がありましたら下記の連絡先までお問い合わせ下さい。ご希望があれば、他の研究対象者の個人情報及び知的財産の保護に支障がない範囲内で、研究計画書及び関連資料を閲覧することが出来ますのでお申出下さい。

また、試料・情報が当該研究に用いられることについて患者さんもしくは患者さんの代理人の方にご了承いただけない場合には研究対象としないので、下記の連絡先までお申出ください。その場合でも患者さんに不利益が生じることはありません。

照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先かつ研究責任者：

防衛医科大学病院 産科婦人科 講師 宮本 守員

住所 〒359-8513 埼玉県所沢市並木 3-2

TEL：04-2995-1211（代表）内線：2363